

ハリウッド映画の陰鬱

藤井 聡

アメリカン・アクションスター

米国カリフォルニア州の現知事が主演する 10 年ほど前の娯楽映画がテレビで流れていた。見るともなしに見たのだが、その内容たるや何とも唾然とするようなものであった。

その筋書きは、おおよそ次のようなものだった。

アメリカのとある一人の平凡な少年が「映画の世界」なる異次元空間へと自由に出入りできる「魔法のチケット」を手に入れる。彼はそれを手に、憧れのアクションスターが主演する「映画の世界」に赴く。無論、そのアクションスターこそ、現カリフォルニア州知事である。そして少年は、映画の世界の中でアクションスターとしばし時を過ごし、映画の中のいくつかの活劇に参加する。無論、少年は、大層ご満悦である。

そうするうち、少年はアクションスターを「現実の世界」に連れてきてしまう。かくしてスターは、現実の世界にて、さながら映画の世界と同様に悪者を懲らしめる大活躍をするのだが、その過程にて、自らが映画の世界なる虚構の世界の住人であることを自覚してしまう。そして最後に、自らの虚構の映画の世界へと戻って行く。

以上のストーリーだけなら、いわゆる大衆娯楽映画ということで、さして気に留めることもなかったかもしれない。しかしながら、筆者が唾然としたのは、以上に続くラストシーンであった。

我らがスターは、現実の世界から映画の世界に戻ると同時に、彼の（映画の世界の中の）上司から「今まで、どこほつつき歩いていたんだ！」と怒鳴りつけられる。我らがスターは、それまでは上司の言うことをよく聞く良い部下であったようだが、ラストシーンでは、上司に次のような調子でまくしたてた。「何を怒鳴っているんだ。俺もおまえもみんな、映画の筋書き通りに動かされているんだ。今おまえが怒鳴ったのも全て、映画の脚本家が書いた通りなんだ。こんなところでまじめに働いてられるか。これから仕事をもっと減らせ。俺の給料を倍にしろ！」。

この最後のせりふ、自分の存在に関する哲学的な虚無感から叫んだ言葉でもないようだし、人間存在の相対性を観客に訴えかけるためのせりふでもないようだった。ただただ、ハッピーエンドを演出するための、ユーモアたっぷりの楽しいせりふ、という位置づけで吐かれた言葉のようであった。それが証拠に、右のせりふを吐いた次のシーンにて、我らがスターは屈託のない笑顔をたたえつつ、“映画の観客”たる我々に手を振って、姿を消していったのである。

私はこのラストシーンを見て、唾然となるとともに、何とも陰鬱な気持ちになった。

その陰鬱な気分なるものは、この映画そのものに向けられたのではない。それは、この

ラストシーンを観ながら、手をたたいて笑い、何とも楽しそうにしているであろう夥しい数のアメリカの大衆人を想像したからであった。

少なくとも筆者には、このラストシーンを観ながら楽しげな気分になることなどできない。もし自分がかのスターの立場であったとしてみよう。今日の前にある全ての物や風景、そして人々が全て“虚構”であると理解したのなら、どのような精神に陥るであろう。今まで為してきた全ての自らの行為が、“筋書き”として規定されたものであったという事実についてどう思うだろう。少なくとも筆者には、その事実を知りながらも、かのスターのように、屈託の無い笑顔にて手を振りながら去っていく事などできそうにない。

おそらくは、この映画が配給されるアメリカにおける大衆人が、右のような想像をしてしまうような人々であるなら、ハリウッドは数億円、場合によってはそれ以上の巨費を投じてこの映画を作り、配給する事などなかったであろう。ハリウッドは、そうした想像を為す人々はむしろ少数派であり、大多数のアメリカの国民がこのラストシーンにて楽しげな気分になるであろうことを、商業論理に裏打ちされたマーケティング戦略にて見通していたのである。だからこそ、将来州知事になるほどの、たいそうな国民的人気を誇る映画スターに、主演を依頼したに違いない。

映画の衰弱，社会の衰弱

ここで、右のような想像を為さず、この映画で楽しむことができる人々というのは、一体どのような人々なのかを考えてみよう。

まず考えられるのは、「そんな想像をすれば、ひどいストーリーであることはよく分かる。でも、これは娯楽映画なのだからいちいち考えていても始まらない。適当に楽しめばいいんだよ」と考える人々である。もし、筆者が上述のような想像を述べれば、筆者をたしなめるように、こうした反応をする人々はかなりの数に上るであろう。

しかし、このように答える人々は、「想像する」なる言葉の意味をはき違えているのではなかろうか。想像するという行為は一見、すこぶる意識的、積極的な行為のように思える。そして事実、特定の状況を意識的、積極的に想像してみることは可能である。しかし、ビルの屋上から足下を眺めれば、誰もが無意識に落ちることを想像し、それが故に恐怖を感じるように、想像するという行為は極めて意図的ならざる無意識的な側面をその本質的な部分に秘めているのではなかろうか。だからこそ、ビルの屋上から下を眺めつつ、怖くないといくら自分に言い聞かせたとしても、沸き上がる恐怖は衰えない。そう考えれば、「適当に楽しめばいいんだよ」なる態度を表明する人々の大多数は、実のところ、目の前のものも、これまでの自らの行為の全てが虚構であったという事実が如何様なものであるのかを、努力をしたとしても十分には想像できない人々なのではないかと思えてくる。

あるいは、映画を観ながらその登場人物の心情を想像できない人々であっても、この映画を楽しむことができるのかも知れない。しかしおそらくは、こうした人々は、かの映画の制作者にとっては想定外の人々に違いない。なぜなら、そもそもこの映画は、映画スターと共に時間を過ごす少年の心情を観客に想像させることを前提とした映画だからである。

そして、かのスターが吐いた「こんなところでまじめに働いてられるか．これから仕事をもっと減らせ．俺の給料を倍にしる！」なる最後のせりふは、アメリカの多くの労働者の共感を得るために用意されたせりふとも思えるからである．少なくともこの映画は、登場人物へのいわゆる“感情移入”を前提とした映画であることは間違いない．

以上を踏まえるのなら、この映画を楽しむ人々は、筆者とは少々質の異なる内容を想像する人々であるかも知れないが、他者の心情を想像する一定の能力を持った人々である、と考えざるを得ない．だとするなら、この映画を楽しむ人々というのは、次のような恐るべき人々であるのかも知れない、という可能性が生ずるに至る．すなわち、この映画のラストシーンのような状況に“実際”に立ち至ったとしても、いわゆる絶望的な心情に陥ることの無い人々、である．

そんな馬鹿な——、とお考えになるかも知れない．

しかしここで、「いま、ここ」で感ずる感覚、あるいは、感情だけが全てであり、時間軸においては過去にも未来にも、空間軸においては他者にも環境にも取り立てて配慮を持たない人物を、あえて考えてみよう．この人物にとって意味を持つものは、いま、この感覚・感情のみである以上、それまでの自らの人生の経緯や、身の回りの様々な物事や制度が辿ってきた歴史なるものは、とりたてて意味を持たない．それ故、この人物にとっては、仮に今までの人生の軌跡や目に見えるものが全て虚構であったとしても、その事実を自覚することは「いま、ここ」の感覚・感情には影響を及ぼし得ない．

無論、いま、この感覚と感情だけに完全に支配されるような人物は存在し難いに違いない．時間軸にも空間軸においても、いま、ここ以外のものに対して僅かなりとも配慮してしまう、それが人間の本質的な性向の一つといって過言ではない．しかしながら、そうした配慮が著しく減退するということは十分にありうるのではないか．そうであるからこそ、米国の多くの観客は、自らの存在の秘密を知ったスターが屈託のない笑顔を振りまく様子を、至極自然な振る舞いとして理解し、屈託無く映画を楽しむことができたのではなからうか．

すなわち、時間軸においては「歴史性」が、空間軸においては「風土性」がともに著しく衰退し、「いま、ここ」の感覚と感情におおむね支配された大衆人、それこそが、この映画を屈託無く楽しむことができる観客なのではないだろうか．

歴史性と風土性と自覚との関係については、例えば和辻哲郎が「風土」の中で次のように論じている．「人間が己の存在の深い根を自覚してそれを客体的に表現するとき、その仕方とはただ歴史的にのみならずまた風土的に限定せられている．かかる限定を持たない精神の自覚はかつて行われたことは無かった．」

ここで映画なるものを、社会の空気を吸い取り、それを具現化する一つの社会的過程であると捉えるのなら、映画は「人間が己の存在の深い根を自覚してそれを客体的に表現する」一つの方途と言って差し支えない．それ故、映画は特定の歴史と風土に限定される．だからこそ、映画が作られる土壌において風土性と歴史性が希薄化されているとするなら、その映画なる人間の客体的表現においても、風土性と歴史性が希薄化されざるを得なくな

る。映画の衰弱は、社会の衰弱と表裏一体なのである。

嫌悪と陰鬱

さて、米国の大衆がいかに風土性と歴史性を喪失した生活を営んでいることを感じたとしても、それが故に陰鬱なる感情が沸き上がることは必然であったのだろうか。もしも彼らが我々とは何一つ関連のない存在であるのなら、そこで沸き起こる感情は、おそらくは陰鬱と言うよりはむしろ“嫌悪”の念ではなかっただろうか。その点を踏まえるなら、歴史性と風土性を十分に持たざる大衆と我々は延々と関わって行かざるを得ない、という事実を前に、陰鬱が沸き起こったのではなかっただろうか。

ここで、改めて風土性と歴史性を持たない大衆と関わっていくとはいかなることであるかを考えてみよう。彼らは、自らの風土性と歴史性を十分には尊重しない人々である以上、他者の風土性と歴史性を尊重することもまた無い。そうである以上、仮に我々が風土性と歴史性を尊重し、その中に胚胎する美なるものや善なるものを保守しようと努めたとしても、何のためにそんな努力をしているのかを理解することができないだろう。そして、我々が保守しようと努める美なるもの、善なるものを、自らの欲望や嫉妬心の赴くままに平気で蹂躪することであろう。

だからこそ、かの映画スターの母国は、中東の風土性や歴史性を十分に顧みることもなく平然とイラクに侵略戦争を仕掛け、半世紀以上前には敗戦国の風土性と歴史性に十分に顧みることもないままに、平然と空想的なイデオロギーに基づく平和憲法の導入を図ったのであろう。

こうしたことはいずれも、「人間とは、かの映画スターの様に、歴史や風土の全てが虚構であったとしても楽しく生きていけるのだ」、という米国大衆の感覚に根ざしているのではなからうか、そして、大衆がそこに存在する限り、同様のことがこれからも繰り返され、我々が保守しようと努めるものを平然と蹂躪しにかかってくるのではなからうか——、この予感こそ、かの映画のラストシーンにて陰鬱なる気分が沸き起こった本質的原因に他ならない。

陰鬱と覚悟の狭間

しかしながら、嫌悪すべき他者からは逃れ得ないという事実を了解しながらも陰鬱なる気分陥らぬ方途は、決して皆無ではないのではなからうか。自問するに、大衆人からは逃れられぬとあきらめるのではなく、対峙せねばならぬと“覚悟”するのなら、そこには陰鬱なる心情は微塵も沸き起こらなかったのではあるまいか。そこに至れば、凜とした空気の中で武者震いするごとく的心境が立ち現れたのではあるまいか。

「世間は非だらけと、始めに思いこまねば、多分顔つき悪くして、人が請けとらぬ物なり。人が請けとらねば、いかようのよき人にて本義にあらず。(葉隠、聞書第一、五十六)」

確かに、我々の眼前には、保守すべき様々なものが一つ一つ蕩尽されつつある惨状がある。そして、その惨状の背景には、米国の、そして、日本の大衆人の夥しい数の醜行が潜

んでいる。しかしながら、それを前にして陰鬱に浸りきったとしても何も始まらぬ。無論、我々が何をしたところで、何かを成し遂げ得るか否かは定かではない。しかしながら、いま、ここにおいて為すことができるのは、覚悟をもってその一つ一つに対峙することの他に何も無い。そう構えれば、至る所にひしめく大衆人も、その大衆人に支配される国家ごときのものも、ものの敵ではないと思えてくるではあるまいか。